

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：30106

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02213

研究課題名（和文）精神保健ソーシャルワークの効果的展開のための諸条件の検討：北海道の歴史から

研究課題名（英文）Conditions for the Effective Development of Mental Health Social Work from the Perspective of Historical Research in Hokkaido

研究代表者

永井 順子（Nagai, Junko）

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：00386559

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、北海道における精神保健ソーシャルワーク（以下、精神保健SW）の歴史的展開過程を3類型に分類し、ソーシャルワーカーが自らの置かれた環境において効果的に精神保健SWを展開するために必要な条件として、「機関内における理解、特に、地域リハビリテーションの担い手としての役割への期待があること」と、「家族頼みの地域生活の限界が多機関で共有されること」を見出すことができた。遠方、積雪、産業衰退などのネガティブな要因も背景となって家族頼みの限界が地域内で共有され、多機関連携が可能となっており、そこにおいて精神保健SWは「精神障害者の地域生活の必要に応じていく」ことをアイデンティティとしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で抽出した精神保健SWの類型は、他府県において精神保健SWの歴史を検討する際にも枠組みとして応用可能であり、地域に根差した精神保健SWの実践の歴史記録を蓄積することにおいて資することができる。また、本研究で明らかにした、ソーシャルワーカーが自らの置かれた環境において効果的に精神保健SWを展開するために必要な条件は、ソーシャルワーカーが意識的に醸成していくことにより精神保健SWの展開を生み出すことのできるものであり、実践に示唆を有する。

研究成果の概要（英文）：In this study, we categorized the historical development process of mental health social work in Hokkaido into three types. As a result, we found two conditions necessary for social workers to effectively develop mental health social work in their own environment. One is an understanding of the work within their own institutions, especially an expectation of their role as community rehabilitation providers, and the other is that the limitations of family-dependent community living are shared by several institutions in the area. The limitations of family dependence shared within the community, with background of negative factors such as long distances, snowfall, and industrial decline, enabled collaboration among multiple facilities. In this collaboration, mental health social workers took on an identity of "meeting the needs of persons with mental disabilities living in the community."

研究分野：社会福祉学

キーワード：精神保健ソーシャルワーク 北海道 アイデンティティ 歴史

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

精神保健福祉領域のソーシャルワーカー（以下、SWer）が1997年の精神保健福祉士法によって国家資格<精神保健福祉士>化して20年以上が経過し、近年では求められる役割が従来の精神障害者への社会復帰、地域生活支援から、司法領域や教育、産業・労働分野へも拡大してきた。他方で現場からは、精神保健福祉士に各種制度上の役割が付与されるほどに所属機関内の「決められた仕事」に追われ、地域資源の開発や地域住民への啓発普及活動など、黎明期のSWerが担っていたような機関内の業務を超えた活動がしにくくなっているという声も聞かれる。それゆえに、精神保健福祉士のみならず精神保健ソーシャルワーク（以下、精神保健SW）自体のアイデンティティ（固有の存在意義）を再考する動きが、職能団体においても精神保健福祉領域の研究者においても顕在化している状況がある。

一方で、日本の各地における精神保健SWの歴史の検証は十分に行なわれてきたとはいえ、精神保健SW実践の歴史的積み重ねのなかから、精神保健SWのアイデンティティを抽出することや、日本各地の地域特性に根ざした精神保健SWの効果的な展開のための諸条件を検討することは残された課題となつていると思われた。

2. 研究の目的

研究代表者は、2017～2019年度科学研究費助成事業「北海道における精神保健ソーシャルワークの歴史記録と教育コンテンツの構築」（課題番号：17K04230）（以下、「2017～2019年度研究」）に取り組んできた。その成果をふまえ、本研究では以下の2点を研究目的とした。

北海道の各地の精神保健SWの歴史的展開過程をその地の精神科医療、精神保健の体制や産業などの各種要因との関係から整理し、類型化することにより、SWerが自らの置かれた環境において効果的に精神保健SWを展開するために必要な条件を明らかにすること。諸類型の比較、共通点の検討から、各地の精神保健SWの展開過程に共通する精神保健SWのアイデンティティを明らかにすること。

3. 研究の方法

「2017～2019年度研究」をふまえ、表1の9区域を本研究の対象地として設定し、精神保健SWの展開過程を同地の1.精神科医療体制、2.精神保健体制、3.関連する地域資源、4.産業、5.その他の各種要因と関連付ける分析を行った。1.精神科医療体制を示す指標としては、病院数や病床数、医師の数、患者数、平均在院日数などを用いた。また、精神保健体制や関連する地域資源については、保健所や精神保健協会、家族会や当事者団体等の活動状況から見ていった。以上のため、各地の保健所等諸機関の年報等を現地調査などにより入手し整理した。また、各地のSWerなど関係者15名へのインタビュー調査を実施して、当時の実践状況の詳細を得た。

研究の実施にあたっては、北星学園大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得た（20-研倫35号、23-研倫50号）。

表1 本研究の対象地と特徴

対象地	特徴
函館	1970年以降、市立病院精神科と2私立精神科病院、保健所のSWerが活躍。
西胆振	市立室蘭総合病院精神科分院と2私立精神科病院のSWerが機関内でSW部門を確立。
東胆振	1950年代設立の私立精神科病院にSW部門が存在。機関内でのSW部門の確立や社会復帰施設等への設立等へ関与。
札幌圏	北海道立精神保健福祉センターSWerが各地でSWを伝達。私立精神科病院が多数存在。大学附属病院における精神科医師養成は全道に影響。
稚内	多様な領域の従事者が協力し社会福祉法人を設立、地域生活支援を展開。
名寄	市立病院精神科が広域の医療を担う。早期に通勤寮が発展。
旭川	市立と準公立2病院の精神科、5私立精神科病院が存在、医師の連携が密。
帯広	主に3病院のSWerが連携して機関を超えた「オープンシステム」の地域生活支援体制を構築し、国内でも例外的な短期間の平均在院日数を実現。
釧路	1私立精神科病院を出たSWerによる地域生活支援体制の構築。

4. 研究成果

4-1. 北海道における精神保健 SW の歴史的展開過程 3 類型

本研究の結果、北海道における精神保健 SW の歴史的展開過程を、以下の 3 類型に分類できた。

SWer が所属機関における役割として地域リハビリテーションに関与

: 函館、西胆振、旭川

SWer が所属機関を超えて地域リハビリテーション資源を開拓

: 帯広、釧路、東胆振

医療資源不足などの地域課題が精神障害者の地域リハビリテーション資源を必要とし、多様な担い手による資源開拓が展開

: 稚内、名寄

以下に、類型を導出するために本研究で設定した 5 つの要因（1.精神科医療体制、2.精神保健体制、3.関連する地域資源、4.産業、5.その他の要因）の観点から、各類型の特徴を説明する。

なお、本研究を通して、5.その他の要因として、人口構造の高齢化が精神保健 SW に大きな影響を与えたと考えられた。各地の精神病床を有する病院数（病床数）の 1970 年と 2001 年の比較を表 2 に、高齢化率の 1980 年と 2000 年の比較を表 3 に示す。

表 2 保健所管内精神病床を有する病院数（病床数）

	函館	室蘭 (西胆振)	旭川	帯広	釧路	苫小牧 (東胆振)	稚内	名寄
1970 年	4 (783)	6 (983)	7 (826)	6 (832)	5 (464)	4 (383)	1 (72)	1 (145)
2001 年	6 (1,569)	7 (1,693)	9 (980)	5 (854)	5 (607)	3 (746)	1 (100)	2 1 か所は 士別市 (232)

北海道衛生部保健予防課「昭和 44 年度北海道精神衛生関係統計」1970 年、北海道立精神保健福祉センター『平成 12 (2000) 年度精神保健福祉センター年報』(33)、2001 年、参照

表 3 高齢化率

	函館市	西胆振	旭川市	帯広市	釧路市	苫小牧市	稚内市	名寄市
1980 年	9.2%	10.5% (1985 年)	9.0%	7.8% (1985 年)	6.2%		6.6%	9.0%
2000 年	20.3%	22.0%	17.9%	15.3%	16.9%	16.7%	17.3%	24.2% (上川北 部圏域)

各市統計資料等参照

(1) 類型 ~ 函館、西胆振、旭川

1.精神科医療体制については、1950 年代から基幹となる公立・準公立病院と私立病院により精神科医療体制が形成された。2.精神保健体制と 3. 関連する地域資源については、3 地区とも古くから保健所があり、函館は市立保健所がこの地の精神保健 SW の拠点となった。1971 年から「保健所相談員と精神病院 PSW との連絡会」が開催され、精神保健 SW の価値を各機関の SWer が共有し、その後の保健所社会復帰学級の運営などにつながった。北海道で最も古い保健所である旭川保健所は、1965 年発足の旭川精神衛生協会（各病院医師が主導）の活動を支えた。1976 年に社会復帰学級「ポピー学級」、回復者クラブ「あおぞら友の会」、1980 年に就労中の回復者の会「水曜会」を開始し、準公立病院の SWer らが協力した。西胆振では、病院間の連携が早期からあり（1957 年～日胆地区精神病院連盟のソフトボール大会開催など）、北海道初の断酒会活動が市立室蘭総合病院で行われるなど、地域資源に関しても特色があるが、保健所を拠点とした活動や社会資源開発における連携はあまり見られなかった。

4. 産業については、3 地区とも繁栄した過去があり、北海道内では人口も多い地域である。5. その他の要因として、高齢化が早期に進み、1980 年代頃から精神保健 SW として高齢化対応が行われたことが本研究から明らかになった。函館では保健所の長船浩義 SWer を中心に認知症対応が開始され、1997 年の制度化（痴呆対応型老人共同生活援助事業）に先駆け、認知症高齢者グループホームの実践（函館あいの里）に協力した。西胆振では 1955 年開院の恵愛病院で 1998 年に老人デイケアが開設されたが、それに先立つ病院改築検討委員会では佐藤克彦

SWer が中心的な担い手となっていた。旭川では 1961 年開院の旭川圭泉会病院（開院当初の名称は旭川精神病院）で、1988 年のデイケア開設に尽力した乳井雅子 SWer がその実績を背景として、認知症対応のための相談室の必要性を院内で訴え、実現させた。

以上のように、函館では病院と保健所の SWer が連携し、各機関および本地区において精神障害者の地域リハビリテーションの必要性を浸透させ、資源開拓も行っていった。西胆振、旭川では、医師主導で病院間の連携が行われ、資源が生まれる中で、特に地域リハビリテーションに関わる事柄に SWer の役割が期待され、これに応えることにより、機関内の精神保健 SW の重要性を高めていったことが見て取れた。

(2) 類型 ~ 帯広、釧路、東胆振

1. 精神科医療体制については、経時的にみて精神病床のある病院数が一定という特徴がある。特に帯広は地域完結型で、退院支援が活発、病床数も 1970 年と 2001 年とではほぼ変わっていない（表 2 参照）。2. 精神保健体制と 3. 関連する地域資源については、3 地区で年代は異なるが、いずれも病院や保健所、家族会などが連携して地域活動組織を結成し、そこにおいて SWer が中心となって地域資源開拓を進めたという特徴がある。

帯広では、1968 年から各病院の医師や SWer が保健所と担当者会議を開催し、翌年には SWer の組織も結成（門屋充郎氏、小栗静雄氏、草田修治氏）1982 年の「十勝精神障害者社会復帰促進協会」による共同住居「朋友荘」開設へとつながった。どの病院の退院者も利用できる資源づくり、すなわち「オープンシステム」を特徴とした。さらに、1991 年には「帯広ケアセンター」が設立され、「意、医、職、食、住、友、遊」（自己決定、医療、就労、食事、住居、仲間、余暇）を包括的に支援する体制がつけられていった。

釧路では、各病院家族会を中心として 1972 年に「釧路地区精神障害者を守る連合会『おぞら会』」が結成され、1980 年代には共同作業所作りの主体となった。当初は保健所保健師が尽力、1990 年代後半以降は、釧路赤十字病院 SWer の千葉美也子氏や、釧路優心病院 SWer の佐々木寛氏が活躍し、病院の外におけるグループホームや地域生活支援センターの開設などが行われた。

東胆振（苫小牧）では、1955 年開院の道央佐藤病院で 1966 年に SWer として関原靖氏が採用され、1969 年には SWer が 3 名配置されていた。この SWer たちが家族会運営や社会復帰活動を支援したが、病院に紐づいた資源であった。他方、1986 年に開院した植苗病院は、道外の人材も含め多様な担い手が「地域に開かれた病院」という理念のもと開設に参画したという特色がある。また、植苗病院 SWer であった吉本政秀氏を中心に、1996 年に市内 3 精神科病院から資金提供を受け社会福祉法人せらびが設立され、通所授産施設や精神障害者地域生活支援センターを開設したことは、SWer が所属機関を超えて地域リハビリテーション資源を開拓したことの好例であった。

4. 産業については、帯広は農畜産業で安定、釧路と苫小牧は港町で工業衰退と異なっている。5. その他の要因として、高齢化が遅いことが 3 地区に共通しており、「老後」ではない地域生活を考えるために就労支援などの精神保健 SW が発展したと考えられた。

(3) 類型 ~ 稚内、名寄

1. 精神科医療体制については、それぞれ市立稚内病院精神神経科と名寄市立総合病院精神科のみであり、2. 精神保健体制については、保健所の活動もあまりみられなかった。むしろ、医療保健資源の乏しさから、3. 関連する地域資源に関し、精神医療保健以外の領域が協力して精神障害者の地域生活資源を開拓したという点が本類型の特徴である。

稚内では、障害のある子の働く場を求めていた、宗谷地方精神障害者家族会、稚内養護学校の教職員や父母らによる「養護学校の卒業生を育てる会」、情緒障害児父母の会稚内支部が協力して、1986 年「稚内に共同作業所をつくる会」が結成され、稚内市や市立病院精神神経科スタッフの協力を得て共同作業所「手づくり工房木馬館」を設立、1992 年の社会福祉法人稚内木馬館設立へとつながっていく。一方、中村喜人 SWer ら、市立病院精神神経科スタッフを中心に共同住居建設も進められ、1990 年代後半までに共同住居 1 か所、グループホーム 2 か所ができた。2000 年には精神障害者地域生活支援センターも開所し、精神障害者の地域生活支援の先進地として全国的にも知られた。

名寄では、1960 年設立の日本キリスト教団道北クリスチャンセンター（以下、道北センター）が精神障害者社会復帰活動の拠点となった。ハウレット牧師とその妻が精神障害に理解があり、1961 年に市立病院精神科に着任した熊谷豊次医師がクリスチャンであったことから、患者たちが教会の礼拝に参加するなど交流を進めていった。1980 年には熊谷医師が、1981 年にはハウレット夫妻が名寄を離れたが、1979 年に道北センター主事に着任した岸本芳朗氏が想いを引き継ぎ、家族会、教会、名寄市社会福祉協議会、名寄市立病院で構成する「名寄地区精神障害回復者福祉協会」が主体となって、1983 年に通勤寮「名寄緑ヶ丘寮」が設立、岸本氏が寮長に就任して、SWer としての活動を開始した。その後、1990 年には社会福祉法人道北センター福祉会が誕生、精神保健法上の社会復帰施設として「緑ヶ丘寮」「緑ヶ丘授産所」がスタートし、地域の支えを得ながら活動を継続していった。

4. 産業については、稚内では 1970 年代後半の「200 カイリ規制」により漁業・水産加工業

が衰退した。これにより子どもの非行が多発したことから、地域で子どもを育てるという考えのもと「子育て運動」が行われており、それが上述したような、障害のある子どもの育ちに関しても全市的な協力を得る土壌を形成したと思われた。5. その他の要因として、両地区に共通して1980年代以降人口減少が進み、高齢化も早い。この点は、上述した精神障害者の地域生活支援の体制を維持することの難しさを、2000年代後半から生じさせていた。

4 - 2 . 小括

研究目的 について、「機関内における理解、特に、地域リハビリテーションの担い手としての役割への期待があること」と、「家族頼みの地域生活の限界が多機関で共有されること」を必要な条件として見出すことができた。

「機関内における理解、特に、地域リハビリテーションの担い手としての役割への期待があること」については、類型 の地区に顕著であるが、類型 の地区においても、主に所属機関である病院の医師の理解があってこそ、地域活動組織のなかでSWerが中心的な役割を担うことができていた。また、「家族頼みの地域生活の限界が多機関で共有されること」については、精神障害者の地域生活の支え手は第一に家族と考えられてきた歴史があり、どの地域においても、家族頼みの限界が地域資源開拓の背景にあった。たとえば、保健所の社会復帰学級は退院後の日中活動の場として、家族のニーズでもあった。また、北海道は面積が広く、積雪もあり、通院の不便さがあるため、退院後、病院に近い住居のニーズが高く、早期に共同住居がつくられていた。さらに、退院して地域生活が開始すると次には働く場や相談する場が必要というように、精神障害者の地域生活の必要に応じていくことが、各地の精神保健SWの展開として見られた。その際、その必要は家族だけでは担いきれないものであることが、遠方、積雪、産業衰退などの地域のネガティブな要因も手伝って地域内で共有され、多機関が連携した精神保健SWの展開を生み出していた。

この「精神障害者の地域生活の必要に応じていく」ことは、研究目的 として設定した、3類型に共通した精神保健SWのアイデンティティであった。各地において断酒会などの当事者活動は重要な地域資源であり、その支援は精神保健SWの重要な役割であった。このことは、北海道の精神保健SWの代表例である浦河町において顕著にみられた。浦河町ではアルコール依存に苦しむ方が多くおり、治療、その後の断酒会の活動が活発であり、浦河赤十字病院の医師、SWer、町や北海道の保健師たちのサポート、連携があった。また同病院のSWerとして採用された向谷地生良氏を中心として、徹底した「当事者主体」という思想、実践が当事者、専門職や地域・町民の意識に変革をもたらし、「浦河べてるの家」を中心とした地域活動、社会資源開発を成し遂げていった。浦河町は上記3類型には含んでいないが、類型化にあたり浦河町における精神保健SWの展開も参考にした。今後は、今回対象とした9地域以外も含めて、当事者活動と精神保健SWの関係について整理していく予定である。

なお、札幌圏については調査を進めたものの、都市規模が他の地域とは異なり、医療機関も数多くあるため、今回類型に入れることができなかった。しかし、インタビュー調査の結果、複数の病院のSWerによって組織された勉強会や、居住支援のための連絡会の存在も明らかになり、大都市圏における精神保健SWの展開を整理していくことも次の課題として見えてきた。

さらに、本研究では、札幌市の市立札幌病院静療院と音更町の北海道立緑ヶ丘病院における児童精神科の歴史についても情報を得ることができた。両院とも児童精神科にSWerの配置はなかったが、医師や心理職がSWを担い、各機関の成人病棟のSWerと連携して活動を展開していたことが伺えた。北海道における児童精神保健領域におけるSWの歴史を整理することも、本研究の発展的成果の一つとして、今後、形にすることができればと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 橋本菊次郎、永井順子、松浦智和	4. 巻 29
2. 論文標題 北海道 日高地区における精神保健ソーシャルワークの歴史と展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道医療大学看護福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井順子	4. 巻 53(1)
2. 論文標題 第三次医療圏6区域の歴史研究から（特集 第77回精神保健シンポジウム(北海道) 北海道における精神保健医療福祉の歩み）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心と社会	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 永井順子、松浦智和
2. 発表標題 地域が有する精神保健ソーシャルワークの促進要因の検討 ～北海道稚内市と帯広市における精神障害者地域生活支援の歴史から～
3. 学会等名 第11回日本精神保健福祉学会全国学術研究集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 永井順子、松浦智和、橋本菊次郎、福富律
2. 発表標題 精神保健ソーシャルワークの地域リハビリテーションにおける役割 ～北海道における歴史的展開過程から～
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第30回岡山大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 永井順子
2. 発表標題 コミュニティに根ざした実践を研究すること . 歴史から読みとる
3. 学会等名 日本精神保健福祉学会大会実行委員企画ワークショップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junko Nagai
2. 発表標題 Pioneering Psychiatric Rehabilitation Practices in Hokkaido, Japan
3. 学会等名 Double Tenth - Joint Conference of IASTAM and ASHM (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 菊次郎 (Hashimoto Kikujirou) (30433460)	北海道医療大学・看護福祉学部・教授 (30110)	
研究分担者	福富 律 (Fukutomi Ritsu) (60468840)	東京家政大学・人文学部・准教授 (32647)	
研究分担者	松浦 智和 (Matsuura Tomokazu) (90530113)	日本医療大学・総合福祉学部・准教授 (30127)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	今西 良輔 (Imanishi Ryouzuke) (60746478)	札幌大谷大学短期大学部・その他部局等・准教授 (40107)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関